

マイナスをプラスに変えること

黄金町のまちづくり経緯

黄金町とは、京浜急行本線で横浜より三駅目の「黄金町」駅と、手前の二駅目「日ノ出町」駅との間、大岡川沿いの地域を指します。黄金町の駅舎自体は横浜市南区に位置しますが、まちの呼び名としての「黄金町」は、大部分が横浜市中区に属します。



伊勢佐木町は目と鼻の先、ピカピカのみなとみらい地区も近いにもかかわらず、外から見たこのまちには独特の匂いがあります。「黄金町に住んでいる」と告げると「えっ？」と驚かれ、心なしか眉をひそめられるようなまち。

独特の匂いの理由は、このまちの歴史を知ればわかります。



黄金町の様子

●麻薬銀座と「ちょんの間」の時代

第2次大戦後、横浜の中心部が米軍によって接收されると、それによって追われた人々が黄金町や隣接する初音町・日ノ出町に移ってきました。この地区には京浜急行の高架下などの空き地があったからです。

山側の野毛地区には闇市が形成されたこと、港湾で働く日雇い労働者を斡旋する職業安定所ができたことなどから、黄金町近辺にも人、特に男性労働者が多く集まるようになりました。このころから、高架下などの飲食店では違法な売春が行われるようになります。間口1間ほどの1階の店舗で酒などを提供し、狭い階段を上った2階の1～3畳の部屋で売春を行う形態の店舗が多く、「ちょんの間」と呼ばれていました。

また、このまちには麻薬も流れ込み、昭和37年頃には「麻薬銀座」として悪名を馳せていました。大岡川にかかる末吉橋の周辺に、麻薬が来るのを待つ人が100人以上も集まっていた時期もあるといえます。麻薬のまちというイメージが広まり、黄金町・初音町・日ノ出町の出身という、就職を断られたり縁談が反故になったりするほどでした。

その後、地元の麻薬撲滅運動と法律による取り締まりの強化により、麻薬の問題は収束に向かいます。ただ、もうひとつの問題「買春」は、この後もさらに続くことになります。

●京急高架補修工事による特殊飲食店の拡散

特殊飲食店、つまり売春婦を置いていた店舗は、おもに京浜急行の高架下に店を構えていました。

阪神大震災を受け、平成10年頃に京浜急行が高架の耐震工事を計画したことにより、この場所にひしめいていた約100軒の店舗が高架下を追い出されたのですが、業態を変えることなく近所で営業を再開。結果として、1か所に集中していた違法な店舗が周辺に拡散してしまう事態になりました。さらに、震災で商売の場を失った神戸の特殊飲食店なども流れ込み、平成16年頃には250店舗もの違法な店がこのまちにあふれることになります。

地域住民の中には土地を手放してまちを離れる人も増え、まちが急速に壊れていきました。

●Kogane-X 官民一体でのまちの再生

黄金町・初音町・日ノ出町の地域住民に「自分たちのまちがこれ以上壊れるのを止めなければ」という危機感が広がります。

古くからの住民のひとりが「もう住めないから土地を売って出て行きたい」と言い出した時、危機感を共有する二つの町内会—日ノ出町内会と初黄^{はつこう}(初音町・黄金町)町内会が動き出しました。平成 15 年に二つの町内会が連携して「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」が発足します。

この協議会には、地元の市立東小学校のPTAも参加し、安全なまちづくりを共に目指して活動を始めました。さらに協議会には「このまちを将来どういうまちにするか」という、まちづくりの視点が備わっていました。

このまちづくり運動は、警察が加わることにより大きな局面を迎えます。

平成 17 年 1 月、神奈川県警による「バイバイ作戦」が始まりました。違法営業の徹底的な取り締まりです。この地区に 24 時間警察官を配備し、違法営業の撲滅を目指す作戦です。



黄金町付近の交番・警察連絡所

これが功を奏し、違法店舗は一掃されましたが、閉鎖された 250 もの小規模空き店舗をどうするか、などの新たな課題が浮上してきます。

そのころ、現・横浜市立大学准教授の鈴木伸治氏(都市デザイン)が横浜で行った講演会場に、当時の日ノ出町町内会長・小林光政氏の姿がありました。

小林氏は鈴木准教授に自分たちのまちの現状を訴え、「何かアイデアはありませんか」と尋ねました。鈴木准教授は「アーティストを呼んでくるというやり方もあるのでは」と提案したのです。

「初黄・日ノ出町環境浄化推進協議会」では「まちづくり推進部会」を発足させました。平成 18 年 2 月には光を使ったまちづくりイベントを実施し、3 月には小規模店舗転用モデル事業の第一号として、地域防犯拠点「ステップ・ワン」を開所。「初黄・日ノ出町まちづくり宣言」を決定しました。また、多くの人に親しみを持ってもらう目的で、協議会の愛称を「Kogane-X(コガネックス)」と決めました。



Kogane-x の外観

警察だけでなく、行政も動き出しました。

横浜市の創造都市推進課がこの地域に積極的に関わり始め、空き店舗を活用して運営する団体を公募することになりました。呼び掛けに応じたアート系 NPO 法人 BankART1929 が、「ステップ・ワン」と同じ建物内に文化芸術拠点「BankART 桜荘」をオープンさせました。

●黄金町バザール

黄金町のまちにアートを、という話が少しずつ現実味を帯びてきます。

平成 20 年の「第3回横浜トリエンナーレ」の開催に合わせ、このまちでもアートイベントをやろう！という動きが本格化します。空き店舗の活用だけではなく、高架下に新しくスタジオを建てる構想が、京浜急行との交渉により具体化してきました。スタジオの設計には地域の人々との対話が色濃く反映され、貸しスタジオとしての効率よりも、「まちにとっての場所」という視点に力を入れた建物になりました。これが黄金スタジオです。

黄金町でのアートイベント開催に向けてのプロジェクトに、横浜美術館も関わることになり、主席学芸員の天野太郎氏がキュレーターとして加わります。福岡で活動していた山野真悟氏もディレクターとして呼び寄せ、平成 19 年 11 月、「黄金町バザール実行委員会」が設立。実行委員長に鈴木伸治准教授を据え、翌年 9 月の開催に向けて急ピッチで作業が進められることになりました。

イベントの名称は「黄金町バザール」。黄金スタジオと、やはり高架下に新設された日ノ出スタジオをメイン会場として、平成 20 年 9 月 11 日～11 月 30 日まで開催されました。

この年、合計 30 組余りのアーティストとショップが参加し、延べ 10 万人の来場者を迎えた「黄金町バザール」は、平成 21 年、22 年と続き、まちの姿は確実に変わり始めています。

参考文献: 黄金町バザールガイドブック+読本(黄金町バザール実行委員会 2008)

: 黄金町バザール・レポート(黄金町バザール実行委員会 2008)

: Kogane-X ホームページ <http://kogane-x.koganecho.net/>

マイナスをプラスに変えること 山野真悟氏インタビュー

山野真悟氏プロフィール

黄金町バザール ディレクター

NPO 法人 黄金町エリアマネジメントセンター 事務局長

山野真悟事務所主宰



1950 年福岡県生まれ。

1971 年美学校銅版画教場卒。1970 年代より福岡を拠点に美術作家として活動。

1979 年 IAF 芸術研究室設立。

1990 年より街を使った美術展「ミュージアム・シティ・天神」をプロデュース。その後も「まちとアート」をテーマに、アート企画、ワークショップ等を多数手がける。

2004 年～(財)福岡市文化芸術振興財団「ギャラリーアトリエ」の企画運営を行う。

2005 年「横浜トリエンナーレ 2005」ではキュレーターを務めた。

—「アートによるまちづくり」をテーマとして 2008 年に始まった黄金町バザールも、今年で 3 年目です。山野さんはこのバザールにいつ頃から関わっていらっしゃるのでしょうか？

◇「まちの中のアート」という仕事

2007 年の秋から関わっています。すでにその時はバザール実行員会ができていました。アートによるまちづくりという方向性が決まってから、じゃあ誰にディレクションをさせるか、ということで呼ばれたのだと思います。

僕はもともと福岡で、ミュージアム・シティ・プロジェクトというもののプロデュースに関わっていました。これは、福岡の都心部で、商業施設や公共の場所を使って作品の展示をやる、ということから始まったプロジェクトで、1990 年から 10 年間くらい続きました。この「黄金町バザール」に呼ばれたのも、それがきっかけと言えはきっかけです。

その後、2005 年の横浜トリエンナーレの時に、キュレーターとして呼ばれて、横浜に 1 年間滞在しました。当初、僕は、トリエンナーレの「市民担当」という役割の予定でした。

市民協働、のようなプログラムを考えて、それを担当するという役割です。それが、急きょ、トリエンナーレのアジア担当にもなりました。福岡には、アジアの現代美術を取り上げた最初の美術館があって、その関係で僕も色々なアジアの人と会っていましたから、人脈を買われてアジア担当になったと思います。

◇「アート」という言葉を外したアートイベント

実はそれまでは黄金町のことは全く知らず、行政の人たちから地域についていろいろとレクチャーを受けました。当面、彼らのオーダーは、とにかく1回イベントをやっつけてほしい、ということでした。ですから僕の契約期間も、最初はだいたい1年間でした。

黄金町のイベントには、最初は「アートフェスティバル」という名前が付いていました。僕はイベントの中身を企画したり、コンバージョンというか、場所の改装をしたり、あとは地元の方に説明会をしたりしていました。

1年目の黄金町バザールは2008年の横浜トリエンナーレに合わせて開催しました。トリエンナーレは非常にまじめな、堅い感じの内容だったので、こちらでは違った印象のものをやってはどうかと考えました。そこで、できるだけ楽な、敷居の低い、予備知識なしでも楽しめそうなことを意識していこうと、タイトルから「アート」という言葉を取ってしまいました。それが「黄金町バザール」という名称になるきっかけです。アートイベントですよ、というのを前面に押し出すのはやめよう、ということです。

それによって、選択肢がアートだけではなく、ショップだったりカフェだったり、いろいろな職業のものを並列的に並べられるようになりました。一見お店に見えるけど、実はアーティストがやっていたりとか、本当にお店だったりとか。そういうのを混ぜてしまいました。だから来る人には境目がわからない。それは最初のときに意図的にやりました。

また、見る側がリラックスできるかどうかということが重要だと考えました。

日常的な街で展開するアートイベントというのは、そういうことではないでしょうか。

- この黄金町という場所で、アートをやるといったときに、周りの反応はどうだったのでしょうか？おもしろそうだと受け入れられたのでしょうか？

◇地元は「とんでもない」と

最初は「とんでもない」という感じでした。アートと街の再生がどうやってつながっていくのか、どこで結びつきがあるのか、それがわからないと言われました。「アートって、よくわからないアレでしょ？ よくわからない人が来るんでしょ？」という反応です。さらに、「アーティストって貧乏でしょ？ 貧乏な人が集まって、どうして経済的な活性化になるの？」など、ありとあらゆる面から半信半疑状態でした。それが最初の反応です。

結局、「ああ、こういうことだったのか」とわかってもらえたのは、バザールがオープン

してからです。現実の場所に色々ものを起こして、やっと納得してもらえました。

そして、一番の成果は、それで人が来てしまった、ということです。もちろん、トリエンナーレの効果もあります。単独だったらそんなに人を呼べていなかった。トリエンナーレに来た人たちが、こちらまで流れてきていたんです。特に休みの日など、人がぞろぞろとまちを歩いているという、ここ数年間ありえなかった光景が目の前にあって、驚かれました。

◇10万人には勝てない

2008年の黄金町バザールの時には、人の流れが10万人くらいありました。日によってばらつきはありますが、来る日には本当にぞろぞろと人が歩いていました。当時は写真を撮ってはいけないエリアがありました。カメラを向けると、部屋からおばさんが出てきてわあわあ言うような場所です。でも、みんな、そこでバシャバシャと写真を撮るんです。結局、とうとう向こうがあきらめてしまいました。10万人には勝てないと。

外から来た人にすれば、売春店舗などが並んでいるようなところは、やっぱり珍しいんです。今はもう店は閉まっているんですが、形だけは残っていますから。僕も来た当初は、裏路地を歩くのには緊張感がありました。周辺に住んでいる地元の人でさえ歩いたことのない通りというのが、最近まであったんです。でも外部から来た人は、わけもわからず平気で入って行ってしまふ。その効果は大きかったと思います。入って行きたくなるような、風景としての面白さがあるんです。やっぱり特殊な街ですから。他ではありえない建物があつたりしますし。

◇「まち」と「アート」が合流したNPO

黄金町バザールの状況を受け、バザールの途中から、NPOを作ろうということになりました。もともと、地元の「初黄・日の出町環境浄化推進協議会」を、いずれNPOにしようという話があったのですが、バザールの効果で、ひょっとしたらこれはNPOを作るいいタイミングではないか、ということになったんです。僕も最初は1年契約だったのですが、その時に地元の方から「もう少し残ってくれないか」と言われました。

そのNPOは、実質的には、協議会の流れとバザールの流れが合流してひとつになったものです。今までまちづくりをやっていた人たちと、アートプロパーの人間とがひとつになって、NPOを作ったという形です。

ーそういう意味では、アートによる街づくりがそこで一本になってきた感じですね。

◇「観光」というキーワードに込めたもの

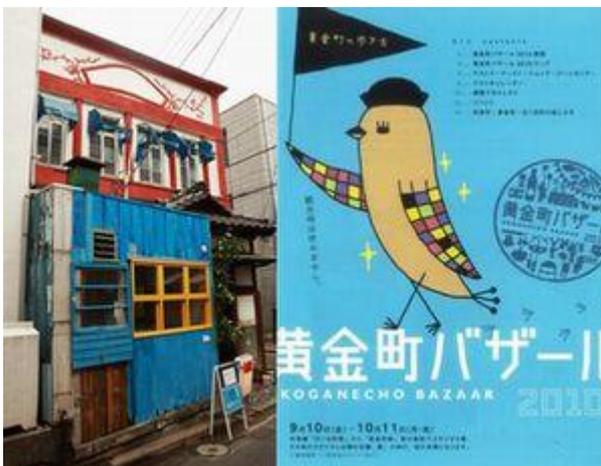
「観光地は休みません」、これが今年の黄金町バザールのテーマです。これは、地域の方に、外部からお客さんが来るという意識を持ってください、という期待を込めてのテーマ

なんです。このあたりはもともと、卸屋さんの街でした。ですから普通の会社と同じような営業体系になっていて、土日は閉まってしまい、閑散としてしまう。観光地は、逆じゃないといけない。土日に人が来て、お店も開いているという状態です。これは地域の皆さんも含めて呼び掛けています、「ここは観光地なんですよ、そういう意識を持ちましょうよ」と。そういう意図を込めてのことです。

そうすると、地元の方にも、二軒だけ、バザールの期間中は無休にしますというところが出てきました。もともと日曜日はお休みだったのですが、「自分が開ければ済むことだから開けましょう」と言ってくださったんです。

参加するアーティストたちも、観光というコンセプトを楽しんでいると思います。そうでないと、こういうものはできない。例えばこの建物ですが、隣の部屋にお土産屋さんと呼称してスペースを取っています。観光地だからお土産さんは要るだろうということです。黄金町のシールを作って、キーホルダーまで作って、売っています。半ば遊びですが、観光というキーワードをもとに展開して遊ぶ、そういうことができればいいと思います。いずれ地元の人たちが本気になって、「観光って経済的な効果があるよね」ということになってくれば、これはもう拾いものと言えるでしょう。

今の状況で、ここが観光地です、と言うのは無理がある。それを承知の上でやっています。



写真左: 日ノ出竜宮外観

写真右: 黄金町バザール 2010 のパンフレット表紙

—黄金町付近の空き店舗の契約形態や運営管理の現状、今後の課題について教えてください。

◇空き店舗の活用例を 100 軒まで増やしたい

かつての違法飲食店の空き店舗にNPOが関わる場合、一番多いパターンは、横浜市が

所有者から3年くらいの契約で借り上げ、その管理運営をNPOに委託するというケースです。そしてNPOから、アーティストや店をやりたいという人たちに貸し出しをします。7～8割は1ヶ月や1週間の単位での短期貸し出しですね。また、高架下の建物が現在2ヶ所ありますけど、これは京浜急行が建てて、それを市が借り、NPOが管理しています。日ノ出スタジオと黄金スタジオです。



写真左:日ノ出スタジオ、写真右:黄金スタジオ

もう一つのパターンは、NPOが直接大家さんから借りるというものです。大家さんと賃貸について交渉したり、あるいは大家さんの方から「うちの空いているけどどうか」という話が来たりします。

違法飲食店の空き店舗は、何らかの意味で原形をとどめているものが、120軒から150軒くらいあると言われていています。そのうちNPOが管理しているものが、昔の売買春店舗の単位で数えると40軒はあります。かなり増えましたが、今後さらに増やし、とりあえずは100軒を目指しています。これは行政とNPO共通の目標です。100軒以上を達成して最後の1軒になった時に、ようやく保存の話をしてもいいかと（笑）。



写真：空き店舗の活用例（左上：初音スタジオ、右上：ハツネテラス
左下：黄金ミニレジデンス、右下：カフェ、カジュアルバー）

現在でもまだ、以前の状態に戻りうる可能性がゼロではありません。今でも警察の 24 時間警備体制が続いています。警察が警備体制を縮小したりすれば、また違法店舗が出没し始める可能性があります。

—高架下も含めた地区全体の将来像はどのようなものでしょうか。

◇いずれは外から人を呼べるエリアに

この黄金町に新しい建物が建つとしたら、京浜急行の高架下ですよね。ここは今、耐震補強工事のため鋼板で全部覆われていますが、いずれは開いて、何らかの建物が建つ時が来ます。そうしたらそれが経済的再生の背骨になって、周辺も変わっていきます。

具体的なプランは、部分的にはありますが、全体の計画や時期などの話はまだありませ

ん。

鋼板が完全に開くのは2年くらい先ということです。そう遠くない将来ですね。それまでに何か計画を進めないといけません。高架下の開発は基本的には、京浜急行と横浜市が合意したものしかやらない、という取り決めがあります。

このまちの将来の理想像を考えたとき、まず欲しいのは、今後増えていくアーティストたちが活用できるスペースです。とにかくこのエリアには小さな物件しかなく、大きなものはこの高架下にしか作れないので、そういういろいろな用途に使える大きなスペースの需要がすごくあります。

また、このエリア内には現在、日用雑貨を売る店や、八百屋・魚屋に類するものがあまりなくて、住民の多くはまちの外で買い物をしています。ですから、ある程度の大きさの商業施設も、いずれは必要でしょう。

そういうものがつながっていったら、外からかなりの人を呼べるエリアになると思います。しかも、このように川がそばにあるというのは、非常に有利な条件ですよ。

◇アーティスト・イン・レジデンス構想

この場所に滞在しながらアート作品作りをしてもらう活動、いわゆるアーティスト・イン・レジデンスについては、すでに始めています。NPOが招待したキュレーターがいま滞在しています。また、よその団体、例えば美術館が招待したアーティストを預かったりします。そういう場所として、今後もこのエリアが利用される気がします。

また、これは近々始めようと思っていますが、アジアのキュレーターを招待して、黄金町で仕事してもらいます。そのキュレーターを自分の国ではなく、さらにどこかの違う国に行ってもらって、そういうやり方でネットワークを拡げていくようなことをやりたいと思っています。

アーティストはみんな金銭的に苦しい状況です。アーティストに対する報酬は、一般的には生活できないくらい低いんです。黄金町にアーティストを招待する場合、NPOの施設を使えばいいので滞在費は無料ですし、他に製作費と謝礼に当たるものを支払います。だから若いアーティストにとっては、まあそんなに悪くないでしょう。

大学など教育機関との提携はぜひやりたいと思っています。北仲スクールや横浜市大、倉敷芸術科学大学がすでに入ってきています。

－「黄金町バザール」などの活動に対する地元住民からの反応、意識の変化はどのようなものでしょうか？

◇10年まちづくり—最後の鍵は地域の意識が変わること

いつも言うことですが、100パーセント賛成してもらえる活動は、まずあり得ません。では目安は何かというと、賛同してくれる人が増えているかどうか、です。そういう意味で

言うと、徐々に増えているという感触があります。今まで距離の遠かった人たちが、近づいてきています。

最初は距離の遠かった人たちが近づくきっかけとして一番大きいのは、黄金町バザールのサポーターをやってみて、街に来た人たちの反応を見ることです。また、バザールのことが新聞などのメディアに出て、自分たちのまちが外からどう見られているかを、第三者から言われます。そういう機会がどんどん増えていくわけです。

するとどうしても、自分たちのまちが今どういう状況にあって、NPOがどういう活動をしているかを認識していきます。そういうことでも意識が変わっていきますよね。

このNPOがスタートして、まちづくりがこれでもうだいたい出来上がる…と言うには、10年くらいかかるだろうね、と言われていました。10年くらいを一応目安にして、3年くらいで少しずつ軌道修正します。ですから、まだ入り口くらいですね。

最後は、地域のみなさんです。みなさんの意識が変わって、これはこうなるんだ、これはやろう、というところまで来ないといけないと思っています。それでも、意識が変わる速度はちょっとずつ上がっていますね。思ったより早いなあ、と感じます。

そもそも、この初黄・日ノ出環境浄化推進協議会ができたのも、長年ここに住む住民の方々が声をあげたことがきっかけです。地域住民の中に「どうにかしたい」という切実感があつたわけです。ですから、僕たちに対して最初はあまり期待していなかったにもかかわらず、バザールなどを経た今ではとても協力的になってくれた方々もいます。

一 山野さんが、黄金町で、アートの視点からまちづくりに取り組まれて感じたこと、今後についてお聞かせください。

◇「まちが変わっていく」のをリアルタイムで見る貴重な経験

黄金町での仕事で恵まれていると思うのは、まず、地域の人たちの目的意識が高いことです。地域の人たちの目標がばらばらではなく、「この地域が住みやすくなって、経済的な再生をすること」という点で共通しています。だから、何をやらなければいけないかという、課題に対する対応が明確に出していただけます。

さらに、行政と警察がすごく協力的なことです。特に警察は、常に出入りをして、細かいことまでチェックしてくれています。要するに、周りの人たちの協力体制ができているんです。

僕としては、これが自分の最後の仕事だと思っています。ここへ呼んでもらって、よかったと思います。今まで色々なことをやってきて、やっとそれが形にできる。確かに大変ですけど、やりがいがあり、結果がすぐ見えますから。

やはり、まちが変わっていくのを見るというのは、なかなかできない体験だと思います。それも、自分が関わることによってまちが日々変化していく現場を、リアルタイムでじっ

と見ているわけですからね。

この現場には完成した「模型」はありません。アートの手法、つまり、書いては書き直す手法です。一回やってみて人の意見を聞き、軌道修正をするという作業の繰り返しです。最初からそびえ立つ模型があって、そこに向かって走る、というやり方とは全然違うわけです。

まちづくりの専門家ではないアートプロパーの僕を事務局長という立場に置いているのが、地域のバランス感覚の表れだと思います。おそらく僕みたいな立場の人間というのは、誰かと特別に近づきすぎることもないし、離れていくこともなく、誰とでも等距離にいる。それもやはりアートのことだと思います。

今後のNPOの活動としては、建築家の人たちともっと幅広いお付き合いをしたいと思っています。できれば毎年5組ずつぐらいこの街に来ていただいて、いろいろな規模のコンバージョン*1を進めていただきたいと思います。

*1：建物に与えられた元の用途を新たな用途へ転換する手法のこと（出典：黄金町バザール 2010 パンフレット）